新潟県山岳協会第 62 回自然保護研修会 in 佐渡（ドンデン山金北山）山行報告 5 月 13 日～15 日

CL：菊池典雄、SL：吉川りつ子、井上里美、鈴木愛子、鈴木憲二、庭田容子、八角洋、小俣順子、菅井修、寺崎眞理

1 日目（5 月 13 日）

○菊池車…井上、吉川、菅井
○八角車…鈴木愛子、鈴木憲二、小俣、寺崎
　各車、ピックアップの上、関越自動車道へ。午後 10 時前後三好 SA で落ち合い、赤城高原 SA で仮眠。

2 日目（5 月 14 日）

　早朝 4 時過ぎ出発。東北自動車道新潟中央 JCT で降りる。整った新潟市の町並みを通り、佐渡汽船新潟港旅客ターミナル着。ターミナル内はちょうど 15 日に行われる「2016 スポニチ“佐渡ロングライド２１０”」に参加する、ロードバイクが入った輪行バッグを提げた人々でごった返していた。ロングライドは 4 コースに分かれており、佐渡を 1 周するライダーは2,000 人余り、他のコースを合わせると 3,000 余りの人々が集まっているというのだから、混雑するはずだ。

最高峰の金北山が見える

　新幹線で到着した庭田さんを加え、10 名全員が揃った。今回の山行は菊池さんの義弟を通じ新潟県山岳協会自然保護委員会の行事に参加するものである。

　並んでやっと乗船したぎゅうぎゅう詰めの船内は横になる場所も見つけにくい。9:20、漸う出航ドラの代わり

に佐渡おけさのBGM。睡眠不足のちば山面々だったが、新潟湾から日本海へ乗り出す様子を暫し眺め、心地よい海風に当たったり、ビールに親しんだり、おしゃべりをしたり、船内探検をしたり…と、2時間半を思い思いに過ごし、11:50 無事、佐渡市両津港ターミナル着。ターミナルを一歩出ると、軒を連ねたおみやげ物屋は仲見世通りのような賑わいだった。

12:20 総勢55名がマイクロバス2台に分乗。田植えが終わったばかりの田んぼが美しい。バスはドンデン山荘に向かって傾斜のきつい山道を登って行った。両脇の草原には牛の糞が一杯。牛は姿を見せなかったが、放牧されていることが見て取れる。やがて焦げ茶色が周りの景色に溶け込んだ山荘が見え始めた。なかなか素敵な建物である。

新潟県山岳協会作成のスケジュールに沿って活動が始まるわけだが、受付を済ませ部屋に荷物を置き、最初の行事のシラネアオイ群生地の観察に出掛ける。山荘前の広場からは両津市、加茂湖が一望できる。本土の山々も見えるらしいのだが、春霞が邪魔をしていた。暫く歩いて道路の下にある茂みの中に入っていくと、シラネアオイが飛び込んできた。花弁の薄紫色が何とも言えない。此処彼処で「うわぁ、きれい！」「あそこにも！」…と、聞こえてくる。

シラネアオイの群生

14:30 セレモニー、研修会が始まる。

講義Ⅰ

〇塚本健二氏（伝統と環境福祉の専門学校講師、佐渡トレッキング協議会会長）

「佐渡の自然環境（ドンデン山を取り巻く山の環境について）

・山等の名称はアイヌ語で付けられたものなのではないか。

・何百年と続く牛馬の放牧が山脈の稜線に広大な芝高原をつくっていき、人々が触れ合う場になったものの酪農家がほとんどいなくなり、変わっていくであろう景観が残念。

・波打ち際に咲くハマナスと稜線の野茨が交配してコハマナスが誕生した。

・珍しいヤマトグサ（学名；牧野富太郎）

・奇形の天然杉

・佐渡の大縦走（トレッキングルート）、開発中のロングトレイルルート。

塚本氏の話は、これから歩くであろうルートに好奇心を芽生えさせた。佐渡を知り尽くし、佐渡をこよなく愛すればこそ、の話であった。

講義Ⅱ

〇節田重節氏（元「山と渓谷」編集長・山岳図書編集部部長・取締役編集本部長、明治大学山岳部OB会会長、日本ロングトレイル協会会長等）

研修会

山と自分との関わり、「山と渓谷社」入社から退職までのこと、植村直己とのこと。

節田氏はご自分の略暦を話すことで、日本の山岳会の歴史のようなものを掻い摘んでくださった。

18:00 佐渡芸能公演、若者たちの佐渡伝統芸能「鬼太鼓」を観賞した。広場に響き渡る太鼓の音に合わせて赤鬼、白鬼が、そして獅子舞が次々に交代して、狂ったように踊り回る姿は勇壮だった。

鬼太鼓鑑賞

力一杯踊り切り、面を外した若者の汗と荒い息が、佐渡を思う気持ちと次代を担う意志とを感じさせた。

18:30 夕食。時刻通り行った者は既に食事が始まっているのにびっくり。長旅の疲れと一通りの行事が済んだ安堵感でどこも各種の酒が進んでいた。その後、三々五々部屋に集まり、会話が弾み、地元の味の差し入れを楽しみ、大いに盛り上がっていた。

3日目（5月15日）

2日目のスタート

5:30 起床であったが、多くの者が日の出を見るために4時頃から外に出ていた。薄く雲が広がっているものの赤らんできた空に真っ赤な太陽が昇ってきた。大佐渡と小佐渡の間にある加茂湖も明るさを増してきた。時間があったので女性軍はドンデン山散策にスタート。山頂にはコハマナスがあり、茎は塚本氏の話にあったハマナスのびっしりした棘の中にバラの棘と思わせるものが見られた。話を聞いていなかったらそのまま通り過ぎたであろう。

7時少し前に6つの班に分かれて出発。金北山まで縦走するので、不必要な荷物は両津港汽船ターミナルまで運んでくれるという。山岳協会の方々の至れり尽くせりのサービスに、有り難く甘えることにした。

ドンデン山荘を出て、昨日シラネアオイを見に行った車道を通り、「金北縦走入口、マトネへ 3.3k、金北へ 13.6k」と書かれた看板から入っていく。入口にはきちんとしたトイレが造られ、登山者への配慮が感じられる。コースタイム5時間半、すぐに青バネ十字路、分岐だ。急登を進み、マトネで休憩。塩見岳の稜線のようで展望がいい。さすが！佐渡。稜線サイドの樹木が生えていないのはシベリヤからの風が諸に当たるからなのだそうだ。石楠花越分岐点で休憩。途中、咲いた時が想像できないくらいのハクサンシャクナゲの大株がでんと構えていた。芝の広場のイモリ平、天狗の休場の休憩。役ノ行者跡には小さな2体の石像がちょこんと置かれていた。

ヤマシャクヤク

オドリコソウ

ルイヨウボタン

風薫る5月そのものの佐渡。ウグイスが鳴き、イモリ池にはサンショウウオの卵、カエルの鳴き声。鏡池を過ぎ、夏道を通る。山道の端にはシラネアオイが此処彼処に咲いている。あれだけ期待して見に行ったシラネアオイが群生していたり数株ずつ咲いていたりと、至る所に当たり前のように咲いている。カタクリも道の両側に群生しており、愛らしい花々が歓迎してくれているように感じる。所々に見られた残雪に「ビールを冷やしたい」の声も。何メートルも積もる雪で大木が根元からねじ曲げられ、その

両津湾、加茂湖を見下ろして休憩

金北山が近づく

樹なしカタクリ

タムシバ

頂上直下までシラネアイオ

両脇から枝を生やした杉やブナの奇木には、人間には手が出せない自然の畏怖を感じる。
12:00 金北山着。金北山山頂の崩れかけた建物は第 2 次大戦後アメリカ軍が使用していたもので、後に自衛隊がレーダーサイトに使い、妙見山に新型レーダーサイトが出来てから荒れ果てているようだ。
　山頂の神社横の小さな参道奥に三角点が隠されて？いた。三角点を仏舎利塔の台座で覆い、その上に小さな仏舎利塔が立っていたのだが、倒れて台座も壊れていたために見ることが出来た。きちんと立っていたら、三角点は探せないだろう。気温が上がってきて、ブヨの大群に閉口。
　ちば山、そして参加者全員で記念撮影後、白雲台目指して下山。金北山には裏から入って来たので、神社はうらぶれて見えたが、立派な参門、トイレ、狛犬を有していた。個人が寄贈したものだそうだ。
　13:00 出発。焦げ茶で塗られた自衛隊レーダーサイトは物々しいが、訳のわからない北朝鮮を見張っているのだと思うと、ある種の緊張感を覚える。

山頂の廃墟化したレーダ施設

妙見山にレーダ施設・左真野湾

　白雲台から金北山の間は防衛省管理道路になっていて通行届けを出さないと通れないとか。これも全て山岳協会の方々が準備してくださった。途中の薄汚れた避難小屋の中には配線を仕掛けたままの配線板、太いコードが一杯でこれも非日常的だった。除雪の際に殉死した隊員の「雄魂」碑、どでかいタイヤの付いた自衛隊の重機が雪の深さを想像させる。自衛隊専用道路のため、砂利と舗装された道なので、生ビールが飲めるという白雲台交流センターに向かって自然と足が速くなる。防衛のため閉まっている門の脇を通り抜けるとやっと下界に出られたという感じがした。交流センターでは 55 名の会メンバーに加えて一般客もあり、生ビールの樽も底を付いてしまった。

14:30 白雲台交流センター出発。市内の田んぼの中で２羽の朱鷺を目撃したラッキーな人たちもいた。15:30 両津港着。少し早い便のフェリーだったので、ロードバイクの帰り客はそう多くなく、船内も
ゆったりしていた。新潟に渡る時はテープ投げを体験できるらしく、ちば山の何人かも参加。かっこいい若者に受け取ってもらったとか、しばしの別れの気分を味わったようだ。

18:35 新潟港着。これからまだ千葉に帰らなければならない。庭田さんと別れ、帰路に着く。翌日未明１時前後、両車共千葉に着く。

強行スケジュールではあったが、誠心誠意我々を歓待してくださった新潟県山岳協会の方々のおかげで充実した 2 日間を過ごすことができた。感謝感謝である。義弟さんと連絡を取り合い、滅多に経験できない有意義な計画を立ててくださった菊池さん、ありがとうございます。（文責:寺崎）